九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

幼児期記憶を再構成する語りの一分析例 : 記憶イメージと感情体験を探る

林, 和歌子
九州大学大学院人間環境学府

https://doi.org/10.15017/15691

出版情報：九州大学心理学研究. 6, pp.149-157, 2005-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2005, Vol.6, 149-157

幼児期記憶を再構成する語りの一分析例[1)]
――記憶イメージと感情体験を探る――

林　和歌子[2)]　九州大学大学院人間環境学府

An analysis of investigating stories that reconstruct childhood memories
――Images and emotional experiences――

Wakako Hayashi (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

Most previous studies concerning childhood memories have focused on the content of those memories. The purpose of this study was to analyze the story, not the content, of childhood memories and to describe the reconstruction processes through storytelling. First, the protocols of 13 female college students were categorized into three groups according to their expression styles. Then the groups were compared in terms of the "images" of the memories and the changing processes of emotion and meaning-making. Accuracy and the positioning of the self were taken to be the "images." Results indicated that the group that expressed more intellectual stories had more accurate memories and re-experiencing of one's childhood than the other groups. This indicates that accuracy was not necessarily proportional to richness of emotional experience, and therefore it could be interpreted as a defensive attitude. Moreover, heavy use of metaphoric or highly abstract expressions might cause confusion for the story-teller because the themes of the story would become very wide-ranging.

Keywords: childhood memories, reconstruction process, image, emotional experience

問題と目的

幼児期記憶に対する学問的関心の起源は古く，精神分析学をはじめ臨床心理学，病跡学，認知心理学，発達心理学など様々な分野で研究が行われてきた。Freud, S.(1899)は神経症の成人の治療を通して，ある一定年齢以前の事柄は想起できないこと，代わりに日常の何でもないような記憶が報告される事実を発見し（幼児期健忘），本当の記憶は抑圧を受けて隠蔽されているものである（隠蔽記憶）と考えるようになった。そこには，幼児の心的態度と成人の心的態度との基本的な差異が如実に表れているとしたのである。それに対して認知心理学の分野では，幼児期健忘のメカニズムを認知発達の側面から解明しようと試みている。幼児のエピソード記憶能力の欠如や時間軸の形成の不十分さが健忘につながること，自己概念の発達にともなって記憶されるエピソードが増加することなどを示し，幼児の能力の発達に焦点付けた研究が積み重ねられてきている（尾原・小谷津，1994a）。

また，幼児期記憶とそれに伴う感情との関連を検討したものも多数見られる。この場合，幼児期記憶は近年関心の集まっている自伝的記憶研究の一部として，その最初期に位置づけられる。幼児期と現在の感情の変遷を調査した尾原・小谷津（1994b）によると，その当時の感情としては喜びの占める割合が高いが，現在では感情を伴わないか客観的な感情のみで新鮮さに欠けること，ネガティブな感情のほうが時間が経つにつれてより薄まっていくことが示されている。この結果は，ネガティブな情動体験に対する適応的機能として働く可能性を示唆していると解釈できる。また，適応度の高い人，感情的出来事体験を直視・対処できる人ほど，就学前の不快な記憶を多く報告し，逆に適応のよくない人ほど快の記憶を多く報告する（斎藤，2001）との結果もある。しかし，想起される記憶にまつわる感情としてネガティブなものが多いとする説，ポジティブなものが多いとする説のいずれも多数存在し（神谷，2002；森，2003），未だ一貫した結果は得られていないようである。

とりわけ臨床心理学においては，パーソナリティおよび病態水準との関連について検討した研究が大部分を占める。幼児期記憶は事実やファンタジー，早期の対象関係や現在の心理状態などの要素が合わさって形成されたものとの見方がされているからである（Mayman, 1968）。最早期記憶から病態水準を見立てることの有効性（Mayman, 1968），インテーク面接での記憶聴取（山中，2001）などは一つのテクニックとして示されており，心理臨床場面で注目されている。また，被虐待者（特に性

[1)] 本論文は，2004年に九州大学大学院人間環境学府に提出した修士論文の一部を再分析し，加筆・修正したものである。
[2)] 本論文作成にあたり，有益なご示唆をいただきました九州大学北山修先生ならびに田嶌誠一先生に心より感謝申し上げます。また，面接調査にご協力いただいた皆様にも御礼申し上げます。

的虐待）やDV被害者の幼児期の外傷記憶への関心が高まるにつれて，社会適応やパーソナリティとの関連を見た研究が近年増加している。このような臨床群を対象とした研究が多い中，健常群における実証研究では，堀井・槌谷（1995）が対人信頼感との関係を取り上げている。その中で，対人信頼感高群は，最早期記憶においてより強い快感情を示し，記憶内の人物像を肯定的に見るのに対して，対人信頼感低群はより強い不快感情を示し，人物を否定的あるいは中性的に見る，あるいは人物の記述がなく無関心である，といった傾向を見出している。一方，平野（2001, 2002）は思春期前期の中学生において，分離個体化が達成されている者は最早期記憶に伴った感情は明るさの程度が低く，母親の姿を想起しないこと，逆に母親を想起した者は抑うつ感が高いことなどを明らかにしている。その他，先に述べたFreudも記憶を単なる治療の素材として見るだけでなく，レオナルド・ダ・ヴィンチやゲーテといった芸術家の幼年時代の記憶から，芸術性や精神生活，パーソナリティを考察した芸術論も展開させており，さまざま解釈可能性を含むものと言える。

これまで見てきたように，幼児期記憶は自伝的記憶の一部と位置付けられることはあっても単独で扱われることは少なく（森，2003），扱われたとしてもその設定された問題意識や測定変数はどこかネガティブなものに偏っている印象がある（斎藤，2001）。Freudの隠蔽記憶に代表されるように，幼児期記憶はその後の人生に大きな影響を及ぼす，どちらかといえばネガティブな，隠されるべきものとして捉えられる傾向が強いように思われるからである。

しかし，私たちは夢・空想と現実との区別のつかないような幼い頃の自分をめぐる思い出を，懐かしさ，気恥ずかしさ，不思議さを持って思い起こすことが可能である（榎本，2002）。幼児期の記憶は両親との関係とともに想起されやすく，そのことによって基本的信頼の感覚を再び得ることができる（長田，1994）ものである。また，子ども時代にまつわる想起内容は，自分は認められ，大切に思われる存在でありえたのだと，自己認知をよいものへと修復する意味があるとも考えられる（村瀬，2003）。高齢者を対象にした回想法もその臨床的援用の一例と考えられ，幼児期の思い出も積極的に題材に扱っている（野村，1998）。このように，幼児期記憶は幼い頃の大切な思い出で，それがあるからこそ生きていけるといった側面も有しているのではないだろうか。

ところで幼児期を研究対象とする場合，幼児の直接観察あるいは実験が一般的である。しかしそこから構築された理論も大人の目からまなざされたものであり，すでにおとなとなった者によって生涯の様々な時期に想いだされる「人生の一時期」，再体験される「原風景としての子ども時代」の位相を忘れてはならないとも述べられている（南，1995）。そのような観点から，川北（1995）の「想像上の仲間（imaginary companion）」研究を読み解くことが可能である。川北は大学生を対象に「想像上の仲間」についての面接調査を行ったところ，多くの被験者は「仲間」の特徴についてのみならず，「仲間」の存在についての自分なりの理解，解釈まで含めて語ることができたという。また，自分の特殊と思われる体験を語ることによって，長い間抱えていた不安の軽減につながったことも報告されている。これらのことからも，人は幼いときにどのようなことを考え，どのようなことに興味を持って過ごしていたのか，そのような自分をどのように捉えているかなど，内省・言語化のできる青年の視点から理解することも意義のあることと考えられる。

概観したところ，これまでの幼児期記憶研究では，登場人物や内容，年齢，時期，記憶にまつわる感情など，想起された記憶内容に注目した研究（下島・小谷津，1998；神谷・伊藤，2000；森，2003）が大部分を占めるようである。すなわち，一場面的な，いわば静的な調査と位置づけられる。しかし，幼児期の記憶は「夢と現実の狭間にあるわけのわからないもの」でもあるため，想起するだけでは意味不明なもので終わってしまう可能性もありうる。そこで，語られているその時の体験を扱うという，動的な，再構成の視点を取り入れ，語られる様相からの接近を行うものとする。そのことによって，幼児期という過去の一時期にとどまらず，現在・未来という時間軸を見出すことも可能になると思われる。加えて，従来の発達心理学の幼児観察とは異なった方向から，幼児期の有り様について，青年にとっての幼児期の持つ意味について考察することとする。なお最早期記憶，幼児期記憶，早期回想など類似の用語がいくつか存在し，定義も研究者によって様々である。本研究では最早期に限らず広く幼児期の記憶を扱っていることや，最早期記憶を厳密に抽出することの困難さ（仲，1994）も考慮し，用語を「幼児期記憶」と統一し，小学校入学以前の記憶であると操作的に定義するものとする。

本研究の実施に際しては，回答拒否ができること，途中でやめても構わないことを明示し，話しすぎてしまわないように調査者からストップをかける，面接終了直後に調査の目的や一般的な知見をフィードバックするなど，倫理的に十分留意して行う。

方　法

対　象

面接調査に先立って質問紙調査を行った。質問紙調査の対象は大学生131名で，想起した記憶の内容や，想起することによる感情の変化，及びパーソナリティ特性と

Table 1
面接調査実施手順

1　記憶の想起
「質問紙の内容について詳しくお話してください」
● 自発的に出てこなければ感情についてたずねる
「その当時はどんな気持ちでしたか」「今はどんな気持ちですか」

2　「このエピソードについて普段思い出しますか」＜想起頻度＞

3　「普段から小さい頃の思い出をよく思い出す/覚えている/話すほうですか」＜経験＞

4　「(たくさんある中から) なぜこのエピソードなのでしょうか」

5　「このことは実際にあったことですか」
「どのくらい正確に記憶していると思いますか」　＜記憶の正確さ＞

6　「どのような形、イメージ、映像で記憶に残っていますか」　＜記憶像・自己の位置＞
●5・6を合わせて＜記憶イメージ＞と命名

7　「このエピソードを覚えていることで、何かよかったことや悪かったことがありましたか」
＜意味づけ①過去から現在へ＞

8　「このエピソードを覚えていることに意味があるとすれば、どんなことでしょうか」
「今の自分と何か関係があるでしょうか」「連想などあれば教えてください」
＜意味づけ②現在＞

9　「これからも思い出すことがあるでしょうか」「あるとしたらどんな時でしょうか」
「今後何か役に立つことがあるでしょうか」＜意味づけ③現在から未来へ＞

10　「自分の幼稚園時代を振り返ってみて、どんな体験をしてきたと思いますか」
「あなたはどんな子どもだったと思いますか」

11　「今のあなたから昔のあなたに声をかけてあげられるとしたら、何と言ってあげますか」
「昔のあなたは何と反応を返してくるでしょうか」＜10・11　幼児期の再構成＞

12　感想、疑問点など

記憶特徴の関連を調査した内容であった（林，2004）。その後，全ての被験者に面接調査への協力を依頼し，同意の得られた大学生13名を対象とした。被験者はすべて女性で，平均年齢は21.08歳（*SD*＝1.50）であった。

手続き

予備調査　臨床心理学専攻大学院生３名に予備面接を実施し，項目を検討後，Table 1 に示す質問手順を選定した。

本調査　調査時期は2003年11月～12月で，１対１の個別面接調査を実施した。所要時間は約20分～50分であった。半構造化面接であるが，可能な限り被験者が自由に語るスタイルを採用し，不足を補う形で調査者から質問を入れた。その際，不快体験をさせたり無意味に深めすぎたりすることのないように，被験者の様子を見ながら質問の仕方などを工夫・配慮しながら行った。面接でのやりとりはあらかじめ許可を取って MD に録音し，逐語に起こしたものを被験者にフィードバックし，研究での使用許可を再度確認した後，分析に使用した。

結　果

逐語録を作成する段階で，感情についてたずねても答えない被験者もいれば，聞いていなくても自発的に語りだす被験者まで，その語り方にも特徴のあることが推察された。そこで＜記憶内容と当時・現在の気持ち（項目１）＞部分の語りを分類対象として群分けを行い，群ごとの比較を行うこととした。分類に際しては，記憶想起

Table 2
記憶想起のパターン4類型（林，2004）

知的な理解の優位な群	感情表現も見られるが，知的な理解が先行し，認識の改めや理解したことが語られる
直接的な感情表現群	感情語を用いてストレートに表現する
感情の言語化の困難な群	何らかの感情を体験していると思われるが，言語での表現が伴わない
記憶想起の困難な群	記憶の正確さにこだわる，記憶のなさについて語る

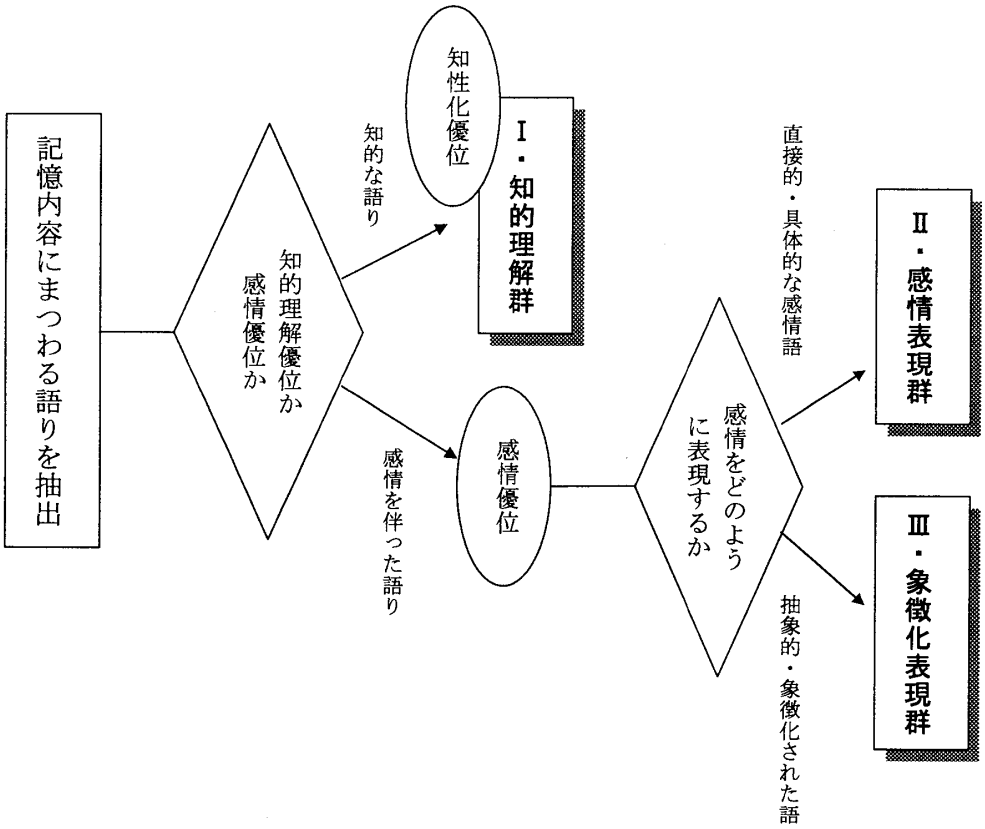

Fig.1　語りの群わけ手順のフローチャート

においてどんな側面に注目しやすいかを4類型にまとめたもの（林，2004）を中心に，呉・南（1997）の語りタイプおよびHowes, Sieg & Brown（1993）の13カテゴリーを参考に，感情への言及の有無，語りの量，言葉の用いられ方などを基準とした（Table 2，Fig.1）。具体的には，感情の言及については「うれしい」「楽しい」「怖かった」などの感情語の有無・多少で分類した。「今考えると」「推測するに」「認識した」といった表現形，「一般的には」「常識で言うと」といった外的・客観的基準や常識を持ち出す点，状況記述にとどまりやすい点，調査者がたずねても感情について言及されない点などを感情表現の困難さや知的表現として捉え，判断した。言葉の用いられ方については，前述のような明白な感情語以外にも，何らかの感情を伴っていると考えられた比喩表現や擬態語は広く感情語に含め，後に群を別に分けた。語りの冒頭部分だけを分類対象としたのは，その後の変化の様相について検討するためである。臨床心理学専攻大学院生2名との分類・協議の結果，以下に述べる3群に分類することが妥当と考えられた。本研究で3群となったのは，記憶のなさを訴える想起困難群に該当する者がなかったためである。

第1群は感情語が少なく，事実として述べているにとどまる。また，当時の状況や他者に対する認識の改め，自分自身への気づきや理解したことなど，知的に「考えられた」表現形を持つという特徴がある。感情面よりも知的理解に意識が向きやすい様子が推測されたことから，

以下「知的理解群」と呼ぶこととする。4名がこの群に該当した。

第2群の特徴は，具体的な感情語があったり，ストレートな表現が多用されていたりする点である。説明を求めればそれについて詳しく表現することも可能である。時系列に沿って出来事や感情の変化を述べ，臨場感のある語り方をする人が多い。以下「感情表現群」と呼ぶ。4名がこの群に該当した。

第3群は，何らかの感情を体験していることは明らかだが，その内容は伝わりにくく，独特であり共感しにくいところが見受けられた。また，話す分量も少なすぎたり多すぎたりと，他者に適切に伝えることの困難さが伺われる群である。「……だと思うけれど，わからない」といった直前の言葉の否定も特徴である。比喩表現や擬態語，情景描写の仕方などで用いられる言葉が抽象的で象徴化されていることから「象徴化表現群」と命名し，5名が該当するとされた。さらにこの群は，語りの量の多少でも2つに分けることができる。

全体に見られた特徴

3群で共通して見られた特徴は，＜意味づけ③現在から未来へ（項目9）＞，＜幼児期の再構成（項目10）＞の2項目であった。

今後も思い出すことがあるかどうか＜意味づけ③現在から未来へ（項目9）＞は，「きっかけがあれば思い出すだろう」との回答が大半を占めた。中にはそれが教訓として作用するだろうという意見も見られた。以前はあきらめてしまった事柄について，「もう一度同じようなチャンスが回ってきた時に思い出すことで，前はあきらめたけど今度は挑戦してみようという後押しになるだろう」といった回答がその例である。また，自分の子ども時代のことを想起することで，「幼児に対する興味がわいた」「将来自分が育児をする際に自分の経験を役立ててあげたい」といった回答も見られた。

＜幼児期の再構成＞については，＜項目10：どんな子どもだったと思うか＞と＜項目11：昔のあなたへ言ってあげたいこと，およびそれに対する反応＞の2つの質問項目があるが，項目11のほうは各群で特徴が見られたので，ここでは項目10についてのみ触れる。回答は，①わがままだった，自分が世界の中心だと思っていた，かわいげがない，ひねくれていた，周りに迎合しないなどと表現される子ども像を報告した人が多く，次いで②しっかりしていた，子どもらしくない子どもだった，ませていたなど“大人びた”子ども像，そして③恥ずかしがりやで人目を気にしていた，人見知りする子ども像，の3タイプに集約された。

各群の記憶特徴や想起体験の差異

次に，各群によって差が見られた記憶特徴や想起体験について述べる。それを表にまとめたものがTable 3である。なお，＜記憶の正確さ（項目5）＞と＜記憶像・自己の位置（項目6）＞を合わせて記憶イメージを理解する質問項目とした。

＜記憶の正確さ（項目5）＞については，知的理解群が非常に鮮明で具体的であるのに対して，象徴化表現群は部分的にはっきりしているがそれ以外はまるでわからない，感情表現群に至っては全体的に本当かどうかはっきりせず，記憶が作られていたり混同されたりしている可能性もあると，群ごとの違いがはっきりと現れた。

また，語られた記憶の映像の様子や自己の位置について問う＜記憶像・自己の位置（項目6）＞では，特に自分がその記憶中に位置しているかどうかに着目して分類した。その結果，知的理解群は全員が自分の見た視点そのままに記憶に残っていると答えたのに対して，感情表現群・象徴化表現群はどこかから自分を見ている，そのイメージの中に自分の姿があるとの回答が多数を占めていた。さらに，象徴化表現群では絵のよう，静止画，モノクロと，限定的で切り取られた一場面の報告になっていた。

また，項目5と6を合わせた記憶イメージ全体については，自分が目で見た景色ははっきりと記憶されているが，本当は見えるはずのない映像の中に自分の姿を見ることが可能な場合は曖昧な感じがするとの結果が得られた。記憶の正確さと記憶中の自己の位置は対応していることが伺える。また，3群の中では知的理解群の記憶イメージが最も正確・鮮明で，幼児期の自分の視点から想起されており，想起された記憶の質の良好さを示している。

この出来事経験がその後の生活に及ぼした影響について＜意味づけ①過去から現在へ（項目7）＞たずねると，知的理解群・感情表現群は悪かった影響を中心に語り，象徴化表現群はよかったことを中心に語るという結果であった。同じ悪かったことでも，知的理解群は「楽しい思い出ではない」「小・中学校時代の自分の出発点」，感情表現群は「恥ずかしい」「かっこ悪い」「ためらってしまう」と回答し，認知的に処理するか，具体的でストレートな表現で表すか，ここでも顕著に差が見られた。象徴化表現群は，「何もない」と言ってひとしきり悩んだ後に，比較的ストレートに「うれしい」「穏やか」「不思議」と表出しているようである。

この記憶を想起したこと，記憶していることの意味を問う＜意味づけ②現在（項目8）＞については，①小さい頃の自分の全貌を端的に言い当てている（例：「私の小さい頃はこんなふうでしたと言えるエピソードです」），②今の自分と共通点・連続性がある（例：「自分の性格

Table 3
各群の特徴

	Ⅰ　知的理解群	Ⅱ　感情表現群	Ⅲ　象徴化表現群
＜記憶の正確さ＞	非常に鮮明で，正確。 具体的な場面で記憶されている。 毎回必ず出てくる記憶がある。	本当かどうかはっきりしない。 作られているかもしれない。 あるはずのないものを覚えている。	部分的にはっきりしている。 一部分だけは正確だが，それ以外はまるでわからない。
＜記憶像 ・イメージ＞	自分が見ている視点。 実際に自分が見た風景が見える。 自分の姿は見えない。	自分がいるのを見ている。 客観的な見方。	絵のように残っている。静止画。モノクロ。 自分をどこかから見ている。
＜意味づけ① 過去から現在へ＞	悪かったことを中心に語られる ・いい思い出ではない ・楽しい思い出ではない ・ひいてしまう自分が残念だ ・小学校・中学校時代の自分の出発点（ちょっと残念な自分）	悪かったことを中心に語られる ・思いだして恥ずかしい，かっこ悪い，しっくり来ない感じは残った ・あのことがあって以来，心の底から納得できなくて，ためらってしまう。 ・中学生くらいまではこのことを引きずってしまっていた。	よかったことを中心に語られる ・思い出せばうれしい ・不思議な感覚 ・穏やかな気持ちになる ・今はあんまり体験できないようなことが体験できた。
＜幼児期の再構成＞	・嫌な自分，可愛げのない自分だったけど，別にいいと思うし，そのままでいいと思う。 ・いとおしい存在 →素直に聞き入れてくれるだろう	・ほめてあげたい ・わかってあげたい ・泣いてもいいよ，かわいそうだった →でも小さい頃の自分は聞く耳を持たず，「だって……だもん」などと言うだろう	・別に何もない ・もう少し子どもらしくなれば？ ・まあ，そのまま頑張って生きて？みたいな感じ ・何してるの？理解に苦しむ →生意気に，そんなこと言われなくてもわかってるよ，と言うだろう

をよく表していると思う」「今の自分の原点だ」），③現在の自分の課題である（例：「いつかは乗り越えたい，受け入れたい部分です」），④意味があるのかどうかわからない，の4つに大別された。知的理解群は②の回答が多く，今の自分が出来上がったきっかけであると捉えているが現在完了形であり，その語り口からは諦観すら伺えるものである。感情表現群は①・③であり，小さい頃の自分を説明すると同時に現在の自分への反省材料・課題と捉えている。象徴化表現群は④あるいは言及がないかのどちらかであった。

＜幼児期の再構成（項目11）＞で，当時の自分への思いをたずねたところ，知的理解群は「そのままでいいと言ってあげたい」と答え，言われたほうもそれを受容することが可能であった。感情表現群は，「褒めてあげたい，わかってあげたい，泣いてもいいよ」との気持ちがあるが，その当時の自分には伝わらないだろうと感じているようである。象徴化表現群は「特には何もない」「もう少し子どもらしくなればいいのに」との思いを持っており，それに対しては生意気な反応を返してくるであろうと捉えている。項目10ではほとんど全員が，かわいらしくない，どこかませて大人びていて，人目を気にするところのある子ども像を共通に思い浮かべたが，ここではそれに対する受容度の差が顕著に表れていると推測できる。知的理解群ではそのままでよしとし，受容でき

る状態にあるのに対して，感情表現群は受容してあげたいけれどもできないでいる葛藤が伺える。象徴化表現群はお互いに距離を置いたような，どこか冷めた関係を想像させる。

群ごとの感情体験の特徴記述

知的理解群　記憶内容の語りでは知的で淡々としており，状況への言及などはあっても自分の感情に対して感情語を使用する回数は多くない。その特徴は，「考えてみると」「推測するに」「～しているところを見ると」といった表現の多用に現れている。話が進んでもそのような構えは基本的に変わらないが，次第に「うーん…」「そうですね…」という語が増え始める。知的理解が先行しており当初は自分の理解について話していたところが，次第にその場で悩みながら話すスタイルに変わっていった過程であると推測される。そのような行為を通してか，防衛的な構えも少しずつ緩みだし，例えば被験者Aさんでは恥ずかしい，バカだという感情しかなかったところに，いとおしいという感情が徐々に意識されるようになっていった。他の被験者の場合も，辛くないし何とも思わないと言い切っていたものが，今考えると辛いはずの出来事だったと，少しずつ情緒的なものへと変化していく様子が観察された。このような経過をたどりながらも面接の終了に近づくにつれ，また最初のテーマへ回帰したり，別のネガティブな話題を持ち出してきたりする傾向（例：「悪いことが多すぎた」，「周りの人がおかしい」）も見られ，生起した感情をそのまま持ちこたえておけず，話題を転換しようとしているかのような印象を持った。すなわち，感情を体験し，それを表現することができないのではなく，長く持ちこたえることができないという可能性が考えられる。緩むこと，感情を体験することがどこか脅威に感じられ，知的に理解しようとする姿勢で安定を図っているスタイルの存在が推測される。

感情表現群　この群は，想起内容を尋ねている段階から当時の自分の感情を交えて説明する人が多く，出てこなくても説明を求めれば詳細に答えることができたところに特徴がある。例えば，「嫌な思い出しかない」「怖い，恐怖心」を繰り返すが，その間にも「困る」「客観的に」「意味なんかあるのだろうか」と自分で距離をとりながら，話せることと話せないこととを調節していたようである。繰り返されるうちに怖い感情もその様子が少しずつ変化し，「今はそこまでひきずっていない」ことや「以前ならこんなこと話せなかった」こと，「（この出来事を）忘れたいとは思っていない」自分など，新しい発見を得ている。そして最後には，抜け出せていない自分と受け止められている自分の両方に気づくことができた。このように，一見同じようなことを繰り返しながらも確実にその中身は変化していき，最終的には葛藤や相反する感情を表現するに至った過程が見受けられた。中にはその葛藤を意識して，強調して語ることができた人もいた。

象徴化表現群　この群の特徴として，語りの最中に別の記憶を想起したり，他に気になることが出てきたりして話題が転換していくことと，擬態語の多用，記憶の正確さへのこだわりが挙げられる。話題の転換については，次第に話が拡散し，連想について語り始め，抽象度を増し，最初語った記憶には最後まで戻ってこないところに他群との違いが見られた。擬態語については，様子や音を表す言葉が，他の群と比較して多く用いられている。それは，「ばしゃんと落ちる」「がばっと起き上がる」「ぞろぞろ歩く」のような情景描写や登場人物の様子を詳細に伝えるのに使用されているものが多い。中には「わーっと泣く」「わたわた慌てる」「カーって（恥ずかしく）なる」といった感情を表しているであろう語も見られ，擬態語を用いることで言葉にならない感情を表現している可能性もある。擬態語には比喩性が備わっており，音声的な表象や感覚が直接的に，私たちの経験に具体的な意味や効果を与える（山梨，1988）のであれば，むしろ心のひだを的確に言い表せているとも考えられる。しかし情景描写の詳細さに比べて，感情については最後まで「不思議」「印象的」にとどまっており，それ以上は触れられることがない。また，最初は楽しい思い出だったものが，話せば話すほど「楽しかったのかわからない」「何が楽しかったのか解明したい」「小さい頃の自分に聞きたい」と変化していき，さらに正確さへのこだわりが増しているようであった。この傾向は特に語りの量の多いグループに顕著に見られた。

考　察

幼児期記憶の語り分析から

本研究では，従来の内容分析から離れて，幼児期記憶について語ることで生じる再構成の視点を取り入れた。そして語りの特徴から3群に分けてその様相を比較検討した。その結果，感情表現群が知的理解群・象徴化表現群と比較して，より自身の感情に根ざした体験が語られていたように思われる。また他の群よりも，今後も続いていく人生の一時期として，時間的な展望の元に自己の体験を位置づけることも可能であった。知的理解群は，記憶の鮮明さや映像の面では記憶の質が最も良いように思われるが，語りの質と必ずしも一致しているとは言えないのは興味深い点である。感情を伴った衝撃的な出来事，個人的な意味を持つ出来事ほど正確に鮮明に記憶される（大矢，1999）のであれば，知的理解群の想起した記憶はかなりの正確度・鮮明度を維持しており，個人に

とっても何らかの感情を喚起される，本人にとっての意味深いものであろう。さらに，この群のみ幼い自分の視点から見た風景が報告されたことからも，あたかも「今ここで」の出来事のように体験されている可能性がある。したがって知的な理解は，生々しい記憶に巻き込まれずに距離を置くための方策と言えるかもしれない。以上のことを踏まえると，知的洞察よりも情感を伴った情緒的洞察の方が治療的であるという精神分析の見解（小此木，2002）と類似した結果が得られたと考えられよう。

さらに，象徴化表現群の擬態語使用が功を奏しないという，従来の比喩研究とは異なる結果となったが，一因として比喩の使用が的確に行われなかった可能性が推測される。一方で，過度の象徴化・抽象化は語り手側の拡散や混乱を招く恐れがあるとも言え，注意を要するかもしれない。この点については今後の研究で明確にしていく必要があると考えられる。

青年が想起し，再構成する幼児期

青年期にある者から想起した幼児の姿としては，自己中心性，大人びた子ども像，人見知りする子どもが特徴であるとの結果を得た。これは，幼児期という時期が，自我が芽生え，第一反抗期と呼ばれる時期を経験するなど，自分への意識が強まる時期であり，自分でできることが重要な意味を持つため，このような幼児像が報告されたと考えられる。また，両親や家庭が記憶物語に登場しないケースや，登場したとしても関与の度合いの低いケースも多く，一見したところ，青年の想起する内容は先行研究で言われているほど肯定的な意味を持ったものとは言えないようにも見受けられる。

しかし，わがままで怖いもの知らずだった自分，今から考えると恥ずかしくなるような自分の姿を抵抗なく，初対面の調査者に対して口にできるという点は注目すべきである。それは，幼児期にその人がわがままを許され，そのままでいいと受け入れられてきた証拠であろうと推察される。中には，「そんな自分だったけど小さい頃のことだから別にいいと思う」と語ることのできる被験者もいた。なかなか本人の口からは話題に上らないが，その背後には許し，見守り続けてくれた環境の存在が感じられ，本人たちにも意識されていたのではないだろうか。

今後の検討課題および臨床場面との接点

記憶とは現在の気分や心理状態を反映するものであり，過去の記憶も現在の視点から読み解かれるものである（仲，1994）ため，現在にも注目して行う必要があったが，本研究ではその点が十分に考慮されていなかったと思われる。また，今回は記憶イメージと感情体験の変化を主に扱ったが，語りの重要な要素であるストーリー性やまとまりという観点からの分析も，今後検討されるべきであろう。

今回の結果はあくまで一般大学生で行ったものであって，そのまま臨床群を理解する手だてとして用いるのは危険である。しかし，幼児期記憶の危険な側面も十分踏まえつつ，今まで肯定的に扱われることの少なかった幼児期記憶を，その人の生き方を支える方向で臨床に活かす何らかの手がかりを探っていくことへとつなげていきたい。その際に，援助者の側に焦点を当てることも，一つの方法として有効ではないだろうか。臨床場面で出会うのは不幸な記憶を背負ってきた人々であることが多いが，そのような彼らを取り巻く援助者側の幼児期記憶観が，クライエントに何らかの影響を及ぼすであろうことは十分考えうることである。多くの先人による文献や臨床経験でも，こころの糧はその個人の子ども時代と深い関連を持ち，子ども時代に根ざすものと言われている（村瀬，2003）。そこで，広く対人援助に関わる人々の子ども時代，記憶観についての検討も視野に入れておく必要があるだろう。

引用文献

榎本博明　2002　物語ることで生成する自己　自己物語法の実践より　発達，23（91），58-65.

Freud, S.　井村恒郎・小此木啓吾他（訳）1970　隠蔽記憶について　フロイト著作集第6巻，18-35，東京：人文書院（Freud, S.1899　Über Deckerinnerungen.）

林和歌子　2004　幼児期記憶の想起と語りに関する研究 ―感情体験および自己との関連に着目して―　九州大学大学院人間環境学府修士論文（未公刊）

平野聖枝　2001　思春期における最早期記憶と分離個体化との関連　日本心理学会第65回大会発表論文集，985.

平野聖枝　2002　思春期前期における最早期記憶と抑うつとの関連　日本心理学会第66回大会発表論文集，233.

堀井俊章・槌谷笑子　1995　最早期記憶と対人信頼感との関係について　性格心理学研究，**3**(1)，27-36.

Howes, M., Siegel, M. & Brown, F. 1993 Early childhood memories：Accuracy and affect.*Cognition,* **47**, 95-119.

神谷俊次・伊藤美奈子　2000　自伝的記憶のパーソナリティ特性による分析　心理学研究，**71**(2)，96-104.

神谷俊次　2002　自伝的記憶の想起に及ぼす感情の影響　南山大学紀要『アカデミア』自然科学・保健体育編，**10**, 1-15.

川北美輝子　1995「想像上の仲間」に関する研究　九州大学教育学部卒業論文（未公刊）

Mayman, M. 1968 Early memories and character structure. *Jour nal of Projective Techniques and Personality*

Assessment, 32, 303-316.
南博文　1995　子どもたちの生活世界の変容―生活と学校のあいだ　内田伸子・南博文（編）講座生涯発達心理学第３巻子ども時代を生きる―幼児から児童へ　第１章　金子書房　Pp.1-26.
森津太子　2003　一番初めの記憶―発現年齢とその特徴―　日本認知心理学会第１回大会発表論文集，248-249.
村瀬嘉代子　2003　＜特別講演＞こころの糧と子ども時代―生きられた時間の体験―　児童青年精神医学とその近接領域，**44**(2)，102-112.
長田由紀子　1994　老人と回想　教育と医学，**42**(11)，1006-1012.
野村豊子　1998　回想法とライフレヴュー　その理論と技法　中央法規
仲真紀子　1994　現在を反映する記憶　教育と医学，**42**(11)，1021-1027.
呉宣児・南博文　1997　語りから見る原風景（１）―個人内の原風景：語りの種類とタイプ―　九州大学教育学部紀要（教育心理学部門），**42**(2)，93-104.
尾原裕美・小谷津孝明　1994a　幼児期健忘に関する理論と今後の展望　哲学（慶應義塾大学三田哲学会）第97集，155-172.
尾原裕美・小谷津孝明　1994b　幼児期記憶の時間的体制化　慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要　社会学・心理学・教育学，**40,** 27-33.
大矢大　1999　記憶の臨床病態14章心因健忘　松下正明総編集　臨床精神医学講座Ｓ２巻記憶の臨床　中山書店　Pp.357-393.
小此木啓吾（編集代表）　2002　精神分析辞典　岩崎学術出版社
斎藤俊一　2001　自伝的記憶の想起における個人差　新潟大学教育人間科学部紀要，**3**(2)，267-276.
下島裕美・小谷津孝明　1998　幼児期記憶の感情と年齢差　慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要，社会学・心理学・教育学，**47**, 11-16.
山中康裕　2001　初回面接において目指すもの（特集：初回面接と見立て）　臨床心理学，**1**(3)，291-297.
山梨正明　1988　認知科学選書17　比喩と理解　東京大学出版会